高島市太田の水田から流下したニゴロブナ稚魚の琵琶湖での再捕状況

根本　守仁・礒田　能年

◆背景・目的

ニゴロブナの資源回復を目的に、近年では水田を活用したニゴロブナの種苗生産が盛んに行われている。このようななか、（独）水資源機構琵琶湖開発総合管理所では、高島市太田に、ニゴロブナの成育の場として「田んぼ池」を整備した。この効果を把握するため、標識放流調査を実施した。

◆成果の内容・特徴

・「田んぼ池」は、水深約30cmで、面積約500㎡と約1,300㎡の池である。水田から流下したニゴロブナは、水田排水路を経て「田んぼ池」へ入り、堤脚水路を経た後、琵琶湖へ移動する。

・水田でのニゴロブナの種苗生産は、（財）滋賀県水産振興協会によって実施され、平成18年6月中旬から7月上旬に体長20.8mmのニゴロブナ稚魚402,000尾が流下した。このうち305,000尾には、水田へニゴロブナ孵化仔魚を放養する時点でALC標識を施した。

・また、（財）滋賀県水産振興会では、他の地域でも水田でのニゴロブナ種苗生産を実施している。琵琶湖北湖では7,103,000尾が放流され、このうち1,802,000尾には上記とは別のALC標識が施されている。

・琵琶湖での再捕調査は、平成19年3月9日～27日に、琵琶湖北湖の沖合で沖曳網により漁獲されたニゴロブナ当歳魚5,953尾を対象に行った。

・このうち、高島市太田の水田から流下したニゴロブナ標識魚は57尾であった。標識した割合で補正すると75尾がこの放流魚であり、混獲率（調査魚に占める割合）は1.26％と推定された。

・再捕時点での平均体長は、高島市太田のものでは70.18±14.68mm、その他の水田のものは80.31±14.91mmであった。

・平成18年11月27日に、琵琶湖北湖6水域へ平均体長67.1mmの種苗、合計103,000尾をALC標識を施して放流した。そして、再捕率（再捕尾数／放流尾数）を比較することにより、放流から同日までの生残率を推定した。この結果、高島市太田のものでは19.44％、その他の水田のものでは15.59％であった。

◆成果の活用・留意点

高島市太田の水田から流下したニゴロブナは、他の水田のものと比較して、体長は小さいものの、生残率は高かった。